

1 新舞子マリンパーク

新舞子マリンパークは、名古屋港最南端の人工島である南5区の一部を整備し、海洋性レクリエーションの拠点として平成9年4月にオープンしました。昔から名古屋市近くの海水浴場として親しまれてきた新舞子海岸の対岸に位置し、海水浴にとどまらず、マリンスポーツや海釣りのほか、ピクニックやドッグラン、バーベキューなども楽しめる場所となっています。

14年6月にアカウミガメがブルーサンビーチを訪れ、産卵したことが話題となりました。卵は名古屋港水族館の人工ふ化場で育てられ、誕生したアカウミガメは再びブルーサンビーチに放流されました。アカウミガメが産卵したことを見記念して、15年9月にウミガメのモニュメントを設置しました。

16年12月に設置された風力発電用の巨大な風車2基がランドマークとなっているほか、伊勢湾を航行する大型船、中部国際空港（セントレア）を離発着する飛行機、鈴鹿山系へ沈む夕日などの眺望を楽しみに訪れる人が数多くいます。



夕日で赤く染まった新舞子の海



新舞子保育園の園児がアカウミガメの子ガメ85匹を放流



海水浴客でにぎわうブルーサンビーチ

佐布里梅と佐布里池梅林

佐布里梅は、2月末から3月上旬にかけて豊かな香りを漂わせながら薄紅色の花を咲かせ、6月上旬には果肉の厚いたくさんの実がなるのが特徴です。令和元年10月に市の天然記念物に指定されています。

佐布里梅の由来は、明治の初期に佐布里地区に住む鰐部亀蔵氏が桃の木に梅を接ぎ木して増やしていくことによるとされています。明治の後期には、現金収入も多いことから競って佐布里梅が植えられ、梅林が形成されました。大正から昭和の初期にかけ、愛知電鉄（現・名古屋鉄道株式会社）が観光地として「佐布里梅林」を宣伝したため、多くの観梅客が訪れるとともに、茶店や売店が出店し、大変なにぎわいを見せました。

梅林は、昭和34年の伊勢湾台風をはじめとした自然災害、佐布里ダム建設などにより多くが池の底に沈み、戦後一時衰退しました。40年に佐布里池の工事が竣工すると、愛知県や地元の人々の熱意により、佐布里梅などが植樹されて梅林が復活しました。また、平成13年の佐布里緑と花のふれあい公園の開園を機に佐布里梅が植えられ、今では愛知県内一を誇る25種類、約6000本の梅林として親しまれています。



佐布里池造成工事



平成4年に開催された第1回梅まつり



着物姿で観梅を楽しむ女性たち

3

岡田の街並み

江戸時代から「知多木綿」の特産地として栄えた岡田地区には、江戸から明治時代の土蔵や黒坂塙など、趣のある風景が今も残ります。大正初期に建てられた木綿蔵を活用した「木綿蔵・ちた」では、伝統的な手織りを体験することができ、知多木綿と手織りの技術を伝えています。また、明治35年に建てられた知多岡田簡易郵便局は、愛知県内でも最古級の局舎で、現在も簡易郵便局として使われています。

岡田春まつりは、本祭が4月16日に近い日曜日に行われ、前日の夜に試楽が行

われます。祭りの起源は定かではありませんが、3台の山車のうち中組（岡田二区）の山車に天保10年の作と書かれています。古い史料によると元禄2年にはすでに山車があつたとされており、さらにつかのぼる可能性があります。

3台の山車は、それぞれ里組が「日車」、中組が「雨車」、奥組が「風車」と呼ばれ、毎年持ち回りで先導役を務める「先車」のときに多い天候を表しているといわれています。また、それぞれが特色ある木偶を有しており、上山で演じられる上木偶（からくり人形）と前台で演じられる下木偶（あやつり人形）が祭りの見物客を楽しませてくれます。



岡田春まつりで集う3台の山車と梶人たち



今も趣のある風景が残る岡田の街並み

(株)IHIのゴライアスクレーン

株式会社IHI愛知工場は、昭和48年に名古屋南部臨海工業地帯の北浜町で操業を開始しました。国内最大級の「100万tドック」を備えた最新鋭の造船所として、大型の石油・LNGタンカーや「東京湾アクアライン」のトンネル工事に使われた掘削機、大型海洋プラントなどを生産し、日本の経済成長を支えました。

日本の造船業は、昭和40年代後半には世界シェアの50%を超えたが、韓国や中国が台頭して劣勢を強いられるようになり、平成30年には愛知工場は閉鎖されることとなりました。

愛知工場の2基のゴライアスクレーンは大型の門型クレーンで、数百tもの重量物を吊り上げることができ、造船所の象徴的な存在でした。名古屋港や中部国際空港、鉄道、高速道路など、どちらでも目立つ本市のランドマークとして多くの市民に親しまれてきましたが、惜しまれつつ令和2年に撤去されました。



上空から見た(株)IHI愛知工場



本市のランドマークとしてたくさんの人を出迎えてきた愛知工場のゴライアスクレーン

5

グリーンベルト

グリーンベルトとは、住宅地と工業地帯を分離するために設置した緑地帯のことです。本市では、埋め立て造成された臨海工業地帯に昭和40年代から進出した企業に対し、西知多産業道路沿いに常緑樹の植栽を義務付けました。その広さは幅約100m、長さ6kmに及びます。

住宅地と工業地帯を分離し、大気汚染、騒音などの環境問題の発生を抑制することを目的とした人工の森でしたが、樹木の成長により見事な自然の森となり、緑園都市を標榜する本市のシンボルとなりました。

企業の丁寧な維持管理により50年以上育まれた森にはさまざまな生物や植物が生息し、現在では貴重な工業地帯における生態系を形成する場所にもなっています。NPO・大学・企業・自治体などが協働する知多半島生態系ネットワーク協議会の活動拠点となっているほか、本市と企業が協働して生物や植物を観察する「自然調査隊」を開催するなど、自然環境や生物多様性について学び、考える場となっています。



さまざまな生物とともに暮らせる自然環境の大切さを考える自然調査隊



上空から見たグリーンベルトと臨海工業地帯

つつじが丘

市制施行時に施工された朝倉土地区画整理事業では、旧日本住宅公団により約0・75km²が開発され、昭和48年3月につつじが丘1～4丁目が誕生しました。つつじが丘団地には賃貸、分譲を含む中高層の集合住宅の他、一戸建ての分譲住宅、民間換地の住宅も合わせ、最終的に約3180戸が建築されました。そこに昭和48年以降約9000人が入居し、本市の人口急増の象徴でもありました。

つつじが丘にある朝倉団地は、当初は入居者の多くが若い夫婦や子育て世代でしたが、建設から50年余りが経った今では、高齢の夫婦や一人暮らし、外国人の世帯も多くなっています。地域のつながりを深めるため、日本福祉大学や地域団体などが関わって、商店街の空き店舗を活用して、手作りのコミュニティスペース「朝倉団地セントラープレイス」を令和元年5月にオープンしました。誰でも気軽に集まる居場所として、地域の多世代・多文化交流の拠点となっています。



センターープレイスで開かれた「キッズおえかき企画」の様子



昭和52年ごろの上空から見たつつじが丘